

金光教に出会う

神・教祖・教え・その営み

教団 その営み

本展示は、「神」「教祖」「教え」「組織」の4つのコーナーを通して、金光教の全体像をつかんでいただき、たくしく金光教を理解していただきたい、との願いに立って、開催いたします。

金光教本部総合庁舎 1F 第一展示室

開室時間 9:00 - 18:00

本部教庁、金光図書館ともに休みの日には、ご観覧できません。どうぞ、ご了承ください。

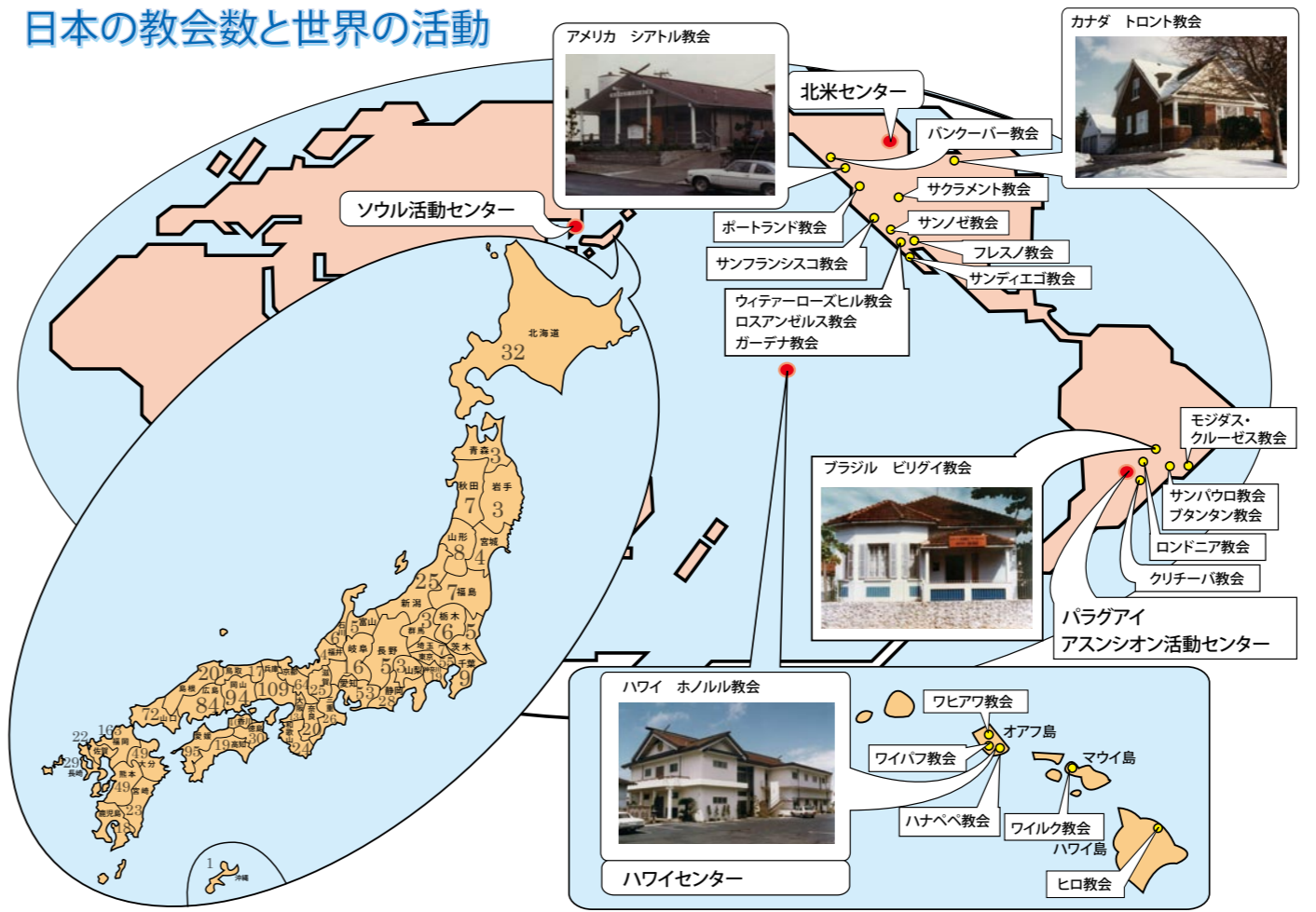
お問い合わせは、金光図書館まで。
TEL (0865) 42 - 2054



金光教は取次の宗教です。取次は、人々の願いを神様に取次ぎ、神様の願いを人々に取次ぐことから始まりました。そしてこの営みにより、救い助けられた人々の中から、教祖様と同様に取次に従事する人が各地に現れることとなり、やがて教団として形づくられてきたのです。
したがって、この取次をはなれて、教団・教会は成立し得ず、本部広前をはじめ全国に広がる教会は、すべてこの取次を中心にして活動が進められています。本部広前における取次は、教主金光様が常時(午前4時から午後4時まで)ご奉仕されています。また金光教では、社会活動をはじめとしたさまざまな活動を行っています。それは、すべての人間の助かりを願ってやまない神様の思いを受け、その思いに行動をもって沿っていかうとする営みでもあります。一人ひとりの助かりと共に世界・人類の助かりを生み出していくことが金光教の願いです。

教団 - その営み -

日本の教会数と世界の活動



人々の難儀に向き合い、その助かりを願って神様に取次ぎ、立ち行く道をお諭し下さった教祖様のお言葉は、助けられた人の感動とともに、現在まで語り伝えられてきました。こんにち、それらは金光教の教えとして、各地に生きる信奉者の信心の指針となっています。教祖様は「この方は、人が助かることさえできればそれで結構である」と仰っているように、どこまでも「人が助かる」というところから、生活の雑事をはじめ、人間と天地自然との関わりに至るまで、幅広く教えを残しておられます。教えとは、神様が願いとされる、人間が真に人間として道理に沿った生き方に導かれるための、「天地の道理」を示したもののなのです。

教えに出会う

天は父、地は母

天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である。人間、また草木など、みな天の恵みを受けて、地上に生きているのである。

日々の改まりが第一

信心は日々の改まりが第一である。毎日、元日の心で暮らし、日が暮れたら大晦日と思い、夜が明けたら元日と思って、日々うれしく暮らせば家庭に不和はない。

毎日の家業を信心の行と心得て

世間には、水の行、火の行などがあり、いろいろの物断ちをする人もあるが、そのような行はしなくてもよい。巡礼のように白い着物を着てあちらこちらを巡り歩く暇に、毎日の家業を信心の行と心得て勤め、おかげを受けるがよい。

魂は天から肉体は地から

死ぬというのは、みな神のもとへ帰るのである。魂は生き通しであるが、体は死ぬ。体は地から生じて、もとの地に帰るが、魂は天から授けられて、また天へ帰るのである。死ぬというのは、魂と体とが分かれることである。

神様は罰を当てない

信心しながらも、次々に不幸せが重なると、「何かのしわざではないでしょうか。何かの罰ではないでしょうか。」と言って参る者があるが、どうして、神がかわいい子に罰をお当てなさろうか。心得が違っている、気をつけよ、とお気づけがあるのであるから、今までとは心を改めて信心をすれば、不仕合せがおかげになってくる。

お礼とお願いをしていれば信心になる

信心といっても別にむずかしいことはない。親にものを言うように、朝起きたら神にお礼を申し、その日のことが都合よくいくように願い、よそへ行く時には、行ってまいりますと言ってお届け申し上げよ。そして、帰って来たら、無事で帰りましたとお礼を言い、夜寝る時にはまた、その日のお礼を申して寝るようにすれば、それで信心になる。

神は人間を苦しめない

だれでも、生まれる日と死ぬ日とは自由にならないのに、生きている間だけ、日柄方位とか何とかと言う。どのような所、日、方角も、人間に都合のよいのが、よい所、よい日、よい方角である。日柄方角などで、神が人間を苦しめることはない。

病気になったとき

祈れ薬れ、にすればおかげも早い、薬れ祈れ、にするからおかげにならない。

歴代金光様

教祖 金光大神	安政 6- 明治 16	1814(文化 11年) - 1883(明治 16年)	下段……生没没年
二代 金光四神(宅吉)	明治 16- 明治 26	1854(安政元年) - 1893(明治 26年)	
三代 金光攝胤	明治 26- 昭和 38	1880(明治 13年) - 1963(昭和 38年)	
四代 金光鑑太郎	昭和 38- 平成 3	1909(明治 42年) - 1991(平成 3年)	
五代 金光平輝	平成 3-	1934(昭和 9年) -	

金光教略年譜

文化 11年(1814) 教祖、香取十平、しもの二男として出生。
安政 6年(1859) 立教。自宅を広前として取次に専念する。
明治 16年(1883) 教祖帰幽。金光宅吉、取次の業を継承。
明治 18年(1885) 神道金光教会設立。
明治 26年(1893) 金光宅吉帰幽。金光攝胤、取次の業を継承。
明治 33年(1900) 「金光教」として教団独立を果たす。
昭和 3年(1928) 金光教教典を刊行。
昭和 31年(1956) 教主選挙を施行。金光攝胤、教主に就任。
昭和 34年(1959) 本部広前祭場竣工。
昭和 38年(1963) 金光攝胤帰幽。金光鑑太郎、教主に就任。
昭和 48年(1973) 本部広前会堂竣工。
昭和 58年(1983) 教祖百年大祭を執行。新教典を刊行。
平成 3年(1991) 金光鑑太郎帰幽。金光平輝、教主に就任。
平成 12年(2000) 教団独立百年記念祭を執行。

歴代金光様
金光教略年譜

教えに出会う

神に会う

私たちは今、この瞬間、どのようにして生きているのでしょうか。息を吸い、吐く。心臓の、トク、トク、という鼓動。自分のいのちを支えるこれらはたらきが、無意識のうちになされています。そこにはどんな力がはたらいているのでしょうか。いのちの営みや誕生には、人間の力の及ばない不可思議なはたらきがあるのです。人間のいのちと生活とは、自分たちの思いだけでなく、それを越えた、目には見えないけれども人間をはじめ万物を生かそうとする大いなる意志と、確かなはたらきとによって、営まれています。人間だけでなく万物も同様のはたらきを受けているのです。その大いなる意志とはたらきを、金光教では「天地金乃神」と称え仰いでいます。そして、天地金乃神様のはたらきが現れる場が「天地」なのです。人間は、天地金乃神様から、たましいと肉体とを授けられ、この世に生まれているのです。

「神に会おうと思えば、にわの口を外へ出て見よ。空が神、下が神。」

教祖様が会われた神様は、天地の間にある、あらゆるものを生かし育てお働きをあらわされる神様でした。そして人間すべてを、「神のいとし子」として慈しみ、そのしあわせを願っておられる神様でもあります。その神様は、自らの御名を天地金乃神とお示しになりました。この世界には、天地金乃神様の働きが満ちあふれています。教祖様は、「この天地すべてが神様のお社であり、ご神体で、人間はそのなかを分けて通っているようなものである」とおっしゃっています。ですから「にわの口(玄関)から外に出て、そこに広がる天地が神様そのものである」ということなのです。

「一心をたてればわが心に神がござるからおかげになるのじゃ」

金光教の神様は、遠く宇宙のかなたにいらっしゃるのではありません。教祖様は人間の心のなかにも神がおられるとおっしゃっています。

「わが子のかわいさを知りて、神の氏子を守りくださることを悟れよ。」

神と人との関係を、教祖様は、よく親子の係りにたとえてお話くださいました。子どもは、限りない親の愛情によって生まれています。子どもが病めば親は心を痛み、子どもの喜びはそのまま親の喜びとなります。人間が神様の恵みのなかで生かされていることを自覚し、人として真実の生き方を進め、神様の願いを現すこと、そのことを神様は「神も助かり、氏子も立ち行き」と仰せられました。それが神様の親神としての願いなのです。

「今、天地の開ける音を聞いて、目を覚ませ」

教祖様のご出現により、神様の願いを人々に伝える働きが生まれました。これにより日柄方位の俗信や古い因習によらない、人としての真の生き方が、神様から教祖様を通して伝えられるようになりました。そこに気づくことから、神様と人間が「あいよかけよで」共に助かる世界が、この世に開けてくる、と教祖様は教えておられます。

教祖に出会う

金光教は、農民であった教祖様と神様との出会いによってはじまりました。このコーナーでは、4つの章に分けて、教祖様のご一生を追っていきます。

その前半生 — 家運隆盛に情熱を燃やす—農民 —

教祖金光大神様は、文化11年(1814)、占見村(現浅口市金光町占見)の香取十平様、しも様ご夫妻の二男としてお生まれになりました。名を「源七」と名付けられ、信心深い父と心の優しい母の愛情を受けて育ちました。

12歳の時、大谷村(現浅口市金光町大谷)の川手家へ養子に入り、名を「文治郎」と改めました。当初は、よそ者として扱われ、つらい時期を過ごしたこともありましたが、次第に、周囲の人々にも認められるようになりました。



教祖様ご使用の農具(とうみ)

青年期になると、教祖様は、その人柄とまじめな仕事ぶりによって、庄屋や村の信頼を得るようになっていきます。

天保7年(1836)、養父川手彗治郎様が他界した後、家督を継いでからは、姓を「川手」から「赤沢」に、名前も「文治」と変えて、幼なじみの古川とせ様と結婚しました。家を盛り立てることに情熱を傾けた教祖様は、寸暇を惜しんで働き続け、家督を継いだ数ヶ月後には風呂場と便所を建築、2年後には、田畑を以前の1.5倍に増やしました。天保14年(1843)には、門納屋を建築、嘉永3年(1850)には、隣村の家屋を買い取り、母屋として改築するなど、赤沢家の隆盛は、周囲の耳目をそばでてるものがありました。しかし、その一方で、長男亀太郎、長女ちせ、次男楨右衛門という3人の幼い命が失われ、さらには貴重な働き手で家族同然の存在であった飼牛を、2年続けて失うという、不幸な出来事が重なった時期でもありました。

神との出会い — 42歳の大患 —

安政2年(1855)、教祖様は「のどけ」にかかり、病状が次第に悪化しました。親類が集まった病氣平癒の祈願の際、義弟の古川治郎に神がかりがあつて、「建築、移転について、豹尾神、金神へ無礼している」と告げられました。義父の古川八百蔵様は、「当家において金神様にお障りはない。方角を見て建てた」と強く反論しました。すると、「それなら方角を見て建てたら、この家は滅亡しても亭主は死んでも構わないか」とさらに厳しい神様からのお告げが返ってきました。そのやりとりを聞いていた教祖様に、神様に自分の真意を申し上げねば、という心が動いた瞬間、今までふさがっていた喉が急に開き、言葉が話せるようになりました。

教祖様は、「どの方角へ無礼しておるか凡夫で相わかりません。方角を見て済んだとは思いません」と神様にご無礼をお詫び申し上げました。神様からは、「其の方は行き届いている。氏神をはじめ神々はみなここへ来ている。神々はみなここへ来て見守っているぞ。その方の信心に免じて、神が助けてやる」との神様の言葉が下がりました。

そして、4年後の安政6年(1859)、人間一人ひとりが抱える問題を神様に届け、神様の願いを人間に伝える中で、人間の助かりを生み出していくお働きである「取次」への専念を、神様からお頼みになられ、教祖様は謹んでお受けになりました。このお頼みを金光教では「立教神伝」といい、この日を金光教立教の日としています。



教祖様ご使用の農具(万石通し)

60歳の再生 — 神前撤去と休息 —

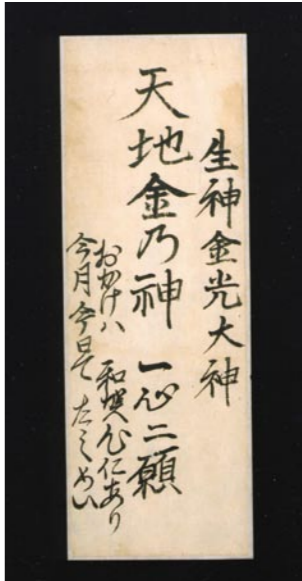
農民の身でありながら、神様の教えを説く教祖様の布教は容易ではありませんでした。慶応3年(1867)さまざまな噂や度重なる山伏の妨害という災難にあいながらも、教祖様は神主職を取得しました。しかし明治6年(1873)には大谷村戸長から「神前の物を一切片付けよ」との命があり、教祖様はその命のままに、信者から供えられた幕や絵馬、提灯、飾り物など残らず片付けて広前を退き、ひかえの間にもって、ひたすら神様に向かう生活に入られたのでした。

そんな教祖様に対し、神様は「力落とさず、休息いたせ」「金光、生まれ変わり、10年ぶりに風呂へ入れ」と仰せられました。元治元年(1864)に禁じられて以来の入浴で「戌の年60歳」であった教祖様は、その後「酉の年1歳」と『金光大神御覚書』に記されています。

教祖様は、約1か月間の「休息」の後、再び大谷村戸長の命により、黙認という形で布教が再開できるようになりました。そして、神様から「天地書附」をしたためるようにとの神命を受けました。

天地書附とは

信心の目当てとして、教祖様が参拝者に下されたものです。金光教では、この「天地書附」を通して神様を拝み、教祖様の教えられた信心をいただいています。教祖様は「これは、けっして守りではない。朝夕によく見える所に張っておくのじゃ。そして、これを忘れぬようにしておればよい」と教えておられます。



永世生き通しの神へ — 教祖様の死 —

明治9年(1876)の秋ごろ、ある信者が参拝した時に教祖様は、「旧暦と新暦とがあるが、先で両方が9日10日と連れ合っていくときがある。その時には神上がりする」と語られています。これは教祖様の死の7年も前のことでした。明治16年(1883)8月21日(新暦9月21日)、神様から「人民のため、大願の氏子を助けるため、身代わりに神がさせる。金光大神ひれいのため」とのお知らせが下がります。このお知らせは、教祖様の死の19日前であり、教祖様の死の意味について、神様自らが明らかにされた神伝です。

教祖様自身、「金光大神は形がじゃまになって、よそへ出ることができない。形がなくなってからは、来てくれと言うところに、すぐに行ってやる」と語っておられるように、自らの死後も生前同様、あるいは生前以上に、神のおかげを知らせ、難儀な人々を取次ぎ助ける働きを現し続けようと考えておられました。そして、神様もそれを願われたのです。教祖様の死は、生身という肉体的な制約を離れ、永遠に人々を救い助ける存在になられるということなのです。



教祖広前

教祖様のご自宅(1850年建築)です。教祖様は、安政6年(1859)から、帰幽するまでの24年間、この家をほとんど離れず、取次に専念しました。